
大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-753-3013

カリフォルニア州立大学ノースリッジ校図書館を訪ねて

龍谷大学経済学部事務室 村上美代治

龍谷大学の海外英語研修講座

本学では、7年前より海外英語研修講座(英語夏期セミナー)が開講されてきました。当初ハワイ大学マノア校で実施されてきた講座も、回を重ねるなかで研修地も次第に拡大され、現在ではハワイ大学とともにカリフォルニア州立大学ノースリッジ校(CSUN: California State University Northridge)、スターリング大学(英国)、リンカーン大学(ニュージーランド)で実施されています。時代の要請に対処するために英会話クラスの延長としての海外実習がつけ加えられたもので、講座受講によって単位が認定される仕組みになっています。

今夏、CSUNでの英語研修に引率者として参加することになり、現地で3週間余り学寮で生活する機会を持ち得ました。しかしながら、短期間であったことに加えて、学生の掌握など多方面に亘る業務を遂行しなければならず、私的な時間は殆ど皆無に等しく、僅かの図書館しか訪問することができませんでした。今回、業務の合間を抜って訪問したなかで一番身近なCSUN Libraryについて知り得た範囲内で紹介を兼ねて報告します。何等かの参考になれば幸いに思います。

CSUNのキャンパス

CSUNはカリフォルニア州立大学19のキャンパスのなかの1つであり、1958年に設立された比較的新しい大学です。ロサン

ゼルス郊外のサンフェルナンドバレーに位置しており、市内からフリーウェイを利用して車で約1時間弱のところにあります。町全体が比較的のんびりした雰意気であり、また大学キャンパス内で生活していることもあって比較的、安全、快適に生活することができました。

気候について言えば、カリフォルニア州は今夏も干ばつの影響を受けて、自然発生による山火事が各地で起こっていることが報道されていました。CSUNの位置しているところは元々砂漠地帯であり、また盆地に位置していることもあって、ロサンゼルス市内に比べて数度温度が高く、日中日向にいと日本に比べて湿気が少ないとは言うものの非常に熱く感じられました。

CSUNのキャンパスは142万㎡に及ぶ敷地に学部・大学院学生3万人と1500人の教職員から構成されているとのことでした。残念ながら夏期休暇に入っていることもあってスポーツ学生やパートタイマーとして働いている学生やサマーコースの学生が目につく程度でした。

CSUN Libraryの概要

キャンパスには50に及び建物があるなかで、図書館はその中心に位置しています。地上4階、地下1階からなり、人文科学、社会科学系資料を収集し利用に供しているOviatt Libraryと地上3階からなり、自然科学系資料を収集し利用に供しているSouth Libraryの両図書館があります。両図書館は300メートル程離れてほぼ向かい合う形で建っています。両図書館とも夏期休暇中の開館時間は概ね8時から16時で、土、日曜日は休館となっていました。利用案内による通常の開館時間は以下の通りです。

月一木曜日	7時45分-22時
金曜日	7時45分-17時
土曜日	9時-17時
日曜日	13時-22時

次に、American Library Directory(1989-90)42th ed.によって蔵書数を見てみると、図書：57万9287タイトル・99万938冊、予約雑誌3773点、マイクロ：フィッシュ246万9204点、フィルム4万9652点、その他視聴覚資料を多く蔵していることが記されています。

今回はOviatt Libraryのみ訪問しましたので、この図書館について紹介します。図書館の1階には受付窓口、貸出・返却コーナー、

レファレンスカウンターがあり、GPO資料、参考図書、カレントの雑誌、新聞が排架されています。2階には書誌、一般、哲学、宗教、歴史、3階には社会科学、4階には音楽、芸術、文学、語学関係図書が排架されています。地下には特殊コレクションとともにマイクロ関係資料が排架されています。新聞をはじめとするマイクロフィルム資料があり、実際にLos Angeles Timeの必要な箇所を複写することができました。

各階には入口に端末がおかれており、これで学内蔵書の検索ができる仕組みになっています。紀要、雑誌や新聞などを除いたすべてが入力されており、オンラインでアクセスすることができる仕組みになっています。1階にはカード目録とともに、21台の端末、障害者にも配慮した低機の端末3台およびCD-ROMが配置されていました。階の上下はエレベーターではなくエスカレーターで移動することになっています。備品について参考に1部分紹介しますと、3階には4人掛け用の平机(2人用が合わさっている)が23個、4人掛け用のキャレルは69個、個室8室、タイプ室があり、更にラウンジには非常に多くのソファが設置されていました。また、低書架は2段でしたが、一般書架は7段のために高さは230cmもあり踏台がないと使用できない状態でした。

この図書館を紹介するに当たって、対外的な組織としてBibliographic Societyと図書館増築という2点に関心を引かれましたので、以下に記します。

(1) Bibliographic Society

地域に関われた図書館を標榜する組織としてBibliographic Societyなる会があるので紹介しておきます。これは、上智大学図書館などで実施されている学外者が年間会費を支払うことにより、一定の利用権利が発生するものと似ていますが、本質的に異なっており、コミュニティーの各人が活発に大学図書館に参加できるように意図してつくられたことが案内書に記されており、大学図書館蔵書の充実とコミュニティーにおける図書館の文化的資源を発展させるため、入会すれば図書館資料を貸し出しすることはもちろん、より重要なことは大学図書館独自では本来入手できない特殊コレクションを会費により購入が可能となり、それを知ることにより満足感が得られるとしています。要するに大学図書館の発展は大学構成員だけによるのではなく、地域のコミュニティーとともに歩んでいくもの

であることを強調しています。図書館の大部分の特殊コレクションはこの会の協力により収集されたと記載されています。American Library Directory(1989-90)42th ed.には多くの特殊コレクション名が記されていますが、どのコレクションが、そしてどの程度の割合で収集に際して貢献したのかわかりませんでした。また、現在の会員は約900名とのことでしたが、その内訳は分からないとの返事がありました。この会が如何なる組織体をもって運営されているのか、図書館と会との関係(両者の相互発展)を調べてみれば興味ある結果が出てくるのではないかと思います。

(2) 図書館増築の進捗状況ならびに内容

Qviatt Libraryは予算不足もあって十分な広さの建物にはならなかったとのことですが、現在Phase IIプロジェクトにもとづいて図書館機能の拡大ならびにサービスの発展を図ろうとしています。このため図書館の両ウイングに増築工事ははじまっており、将来はPhase IIIも検討していく予定とのこと。このプロジェクトによる工事は1989年9月に開始され、来春には完成予定となっておりますが、工期の遅れによって来秋に連れ込むものと思われ。完成の時には1つの本館となり、収蔵可能冊数や座席数は大幅に増えて、現在の50%以上の増加率になります。両ウイングで90123平方フィート増加し、全体で221273平方フィートとなります。その結果、147万冊の図書、その他の資料も現在の25%増の収蔵が可能になるとのことでした。将来の書庫満杯時の方策について質したところ、15年後に書庫が満杯になる計画であり、その後は除却措置で対応するとの説明がありました。

ところで、この建設において収納可能冊数や座席数以上に注目を集めているのが書庫そのものです。ここには過去3年間貸出のない図書、雑誌については15年以前の製本雑誌、参考図書に至っては既に使用価値の無くなったものを対象にアトランダムに収蔵する予定になっています。書庫というよりも倉庫といった方が望ましいスペースに満杯時には約95万冊の資料が排架されることになっています。一方、50万冊ほどの資料は開架書架に排架されて、利用者要求の85~95%に対応できるように計画されています。

一方、書庫の管理をするシステムも開発されています。それが自動出納システム(Automated storage and retrieval system:

AS/RS)なるもので、ロボットが人間に変わって出納を担当するので、図書館で入手した新聞記事にもそのことが取り上げられており、開発された200万ドルのロボット(Leviathan II)は書庫収蔵能力を12倍にするとともに建設コストや冷暖房や照明などの運営費を削減することを可能ならしめたとのこと。利用者は端末操作によって必要な図書を指定すれば、ロボットが書庫内を自由に動き回り、必要な図書をカウンターまで5分から10分で持ってくる仕組みになっています。しかしながらこのシステムを導入することによって館員・利用者ともども書庫に入れなくなります。ブラウジング機能が全く閉ざされてしまうことによって図書館機能が欠落してしまいかねないという問題点も多く指摘されています。ともあれ、来年にはこの壮大な実験は15年から20年で蔵書が倍増してきた多くの大学図書館関係者やLCの注目を集める中で稼働することになろうとしています。コンピューターを最大限に駆使して収容冊数の大幅な増加に対処しようとしている試みは、日々書庫の狭隘に悩んでいる図書館管理者にとって1つの朗報となるものの、図書館の存在や機能を含めた図書館の果たすべき役割について改めて検討材料を提供してくれたものとして、注目していく必要があると考えます。

—お詫び— 「大図研京都 No.70 (1990.11.15)p.3、5行目～の訂正」

(誤文) 最近、朝鮮語の図書が入り、ハンゲル語の学習会を昼休みに行っている。

(訂正文) 個人的に昼休み行われている。時間内研修としては、最近、朝鮮語の図書が入り、ハンゲルの学習会が行われた。

—大図研大学案内— 「江戸文学資料論」 講師：山本 英樹氏

日 時： 1991年1月19日14時～20日16時 8時間講義

場 所： 京大会館 参加費： 3000円

参加申込は竹村 心 (tel.753-3015) まで

—近畿5支部合同例会「新年勉強初め」ご案内—

お 話： 図書館60年—思い出と感想

講 師： 南 論造氏 (日本図書館協会顧問)

日 時： 1991年1月26日 (土) 14時30分～17時

場 所： 神戸市勤労会館5階青少年会館レクリエーションルーム

入場無料

懇親会は18時から「金龍閣」(三宮神戸新聞会館7階) Tel.221-3939

にて行ないます。会費6000円当日納入

交 迎 会 場 : 1907(明40)生、旧制神戸商業大(神戸大経済・経営・法学部の前身)
卒業直ぐ同大図書館勤務、文部省図書館講習所卒、戦時中日本貿易研究所資料課長、
戦後戦線従軍、戦後大阪府立天王寺(現夕陽丘=旧大原社会問題研究所蔵書の半ばを所
蔵)分館長(ヒソト)、同同研創立大会会場に同館を提供)、大阪女子大講師、関西学院調
査室長、同図書館次長、等歴任。著書「図書運用法」(1955、新日本図書館学叢書第10巻、
開書房)、「書窓の感懐」(1979、みるめ書房)の他、戦前の青年図書館員連盟、戦後の日図
研等を通じて、図 研究、図書館界、図書
館雑誌等に論文多数。戦後図書館法施行
後司書講習の講師として図書運用法等
をご担当、現職の司書に弟子も多い。
館界の大先輩、最長老のお一人。現住
所=神戸市灘区上野通1-1-19。

なぐこのご経歴等からも、各図書
館年長館員各位へも待にご案内をお
願いたしたく、どうぞ宜しく。>

地図の記号

① = 14:30～会場(↓ = 入口)

② = 18:00～懇親会(→ = 向)

